

海岸の松原再生しよう

から日本の松原を再生したい」と同センター。再生した松原は二酸化炭素吸収や観光、高齢者の散歩場所にするなど健康づくりに役立つという。

海辺の「松原」の光景を守ろう。財団法人日本緑化センターが、病虫害による衰退が著しい松原の復活を目指し、「日本の松原再生運動」を呼びかけている。地元の人が足を運んで、手入れしたり、新たにマツを植

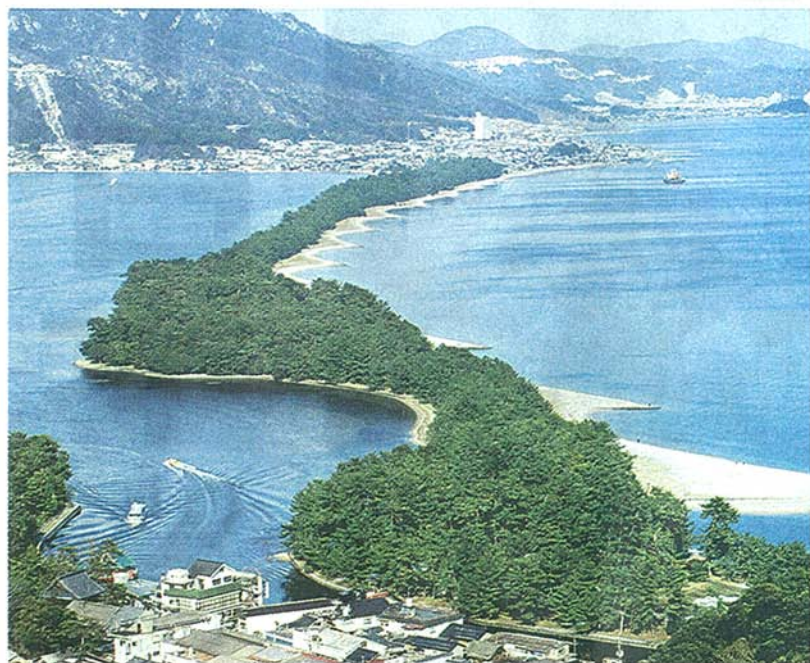
えたりしながら取り組む。百年先には全国の海岸を松原でつなぐ「日本列島松廊」を目指す。(鈴木久美子)

日本緑化センター呼びかけ

白砂青松。日本の海岸の原風景とも言われる。佐賀県の虹の松原や宮城県の大松原など、マツが主役の名所は全国に数多い。

だが、その光景もこの半世紀ですっかり様変わりした。原因はマツ材線虫病による枯れだ。ピーク時の一九七九年には年間約二百四十万立方メートル(家屋十三万五千戸分相当)のマツが枯れた。明治末期に米国から長崎県に入った病害で、徐々に北上し、今では北海道と青森以外のすべての地域に広がっている。海岸の松原は江戸時代

住民との関係を取り戻す



害虫対策で松枯れの危機を脱し、緑の回廊、がよみがえった天橋立=京都府宮津市で

以降、内陸の人家や畑を燃料は石油に変わり、地もいる。海からの風や潮の害から元の人が松原に入らなく、「もう一度、地域の人を守るために、人の手で植えた。放置された松原が足を運び、楽しい時間えられてきた。かつてが病害の温床になったを過ごす経験をして、松は地元の人が松葉かきなり、やぶになって荒れて原と人の関係を修復しながら、風呂たきなどの燃料にも使っていた。けれど、

まずモデル作り

子どもらの植樹も計画

や学識経験者らが二年間かけ、松原の維持管理計画や、松原とともに地域の人がいきいきと生活できるように「松原再生テーマ」を作る。ことしから五年間、毎年一カ所を実施し、センターが各二百五十万円程度を援助する。三年目以降は各地元が計画を実行に移す。

もう一つは「子供の松原再生プロジェクト」。センターが苗木などを提供し、小学六年生が卒業記念としてマツを約五百本植樹する。五年間、各五カ所で行う。六月一日から七月三十一日まで応募を受け付ける。問い合わせは、同センター ☎03・35580055・32611へ。